

(28)

- (2) カールシテットによる七つの自然
- (3) 藤原助市氏による指導原理としての自然
- (4) 野田又夫氏による実在概念としての自然
- (5) 本田善代治氏による人間自然の弁証法的理解

## 3. ルソーにおける自然概念の弁証法的性格

## 1) 自然概念における矛盾対立

- (A) 実在性と価値性
- (B) 淵源性と発展性
- (C) 内在性と超越性
- (D) 純粋性と人為性

## (2) 弁証法的な発展原理としての自然

- (A) 歴史哲學的な概念としての自然
- (B) 本能的な純粋な自然生活—都市的機械的な社交生活に対する田園的牧歌的な自然生活—文明社会における新しい自然生活。

## 8. パスタロッチーの「リーツェルトとゲレトレード」について

— 集団的徳徳と人格的徳徳の問題を中心として —

お茶の水女子大学 岩崎喜一

パスタロッチー研究上において、この著作のわつ意義についてみるに、一つにはそれが彼の教育方法とくに直観の原理の具体的地盤を明かにする側面をわつといえるが、他方にそれが広い意味での彼の社会研究につらなる側面をわつものといふことができるであろう。

一体パスタロッチーの思想と実践が終始大きな社会的地盤の上に立ち、彼自身またそれを裏づけるに足る自覚と同時に研究をわつていたことは、近時のパスタロッチー研究の等しく関心をよせている点であるが、実はこの点に、前掲のオニの点が関連をわつ。ところでこの関連において、この小説のわつ意義について考えてみるに、それは厳密な社会理論あるいは文化理論を提示するものとしてではなく、かえって、そのような理論の自覚化をよびおこすにいたる現実の社会的地盤を具体的に示しているところにあるといえるであろう。このような意味で、この小説は、のちの「探求」(*Nachforschungen*)や「純真者に訴える」(*An die Unschuld*)などのなかに理論化された思想内容を正當に理解するた